

紫波町あづまねエリア
ブランディングビジョン

Partner Note



北海道の次に大きい岩手県＞東京＋神奈川＋埼玉＋千葉。

その大きさから、同じ岩手でも地域によって気候や土壌に個性があり、日本一の冠が付く「ホップ」「りんどう」をはじめ、多種多様なフルーツ、野菜、畜産、お酒が生産される「日本の食料供給基地」です。あの大谷翔平の強靱な身体は、岩手の食で育まれました。

本州一寒い、厳しい北国の自然とともに生きる暮らしをする岩手の人々は、宮沢賢治の「雨ニモマケズ」からもわかるように、「辛抱強く生真面目」「温かく優しい」人が多いと言われてきました。岩手を代表する文化「南部鉄器」や「南部杜氏」の職人に共通する性格です。







紫波町は岩手のおへそと言われ、盛岡と花巻のちょうど中間にあるアクセス抜群のベッドタウン。東京へは新幹線で2時間半です。人口約3万3千人の小さなまちに年間230万人（人口の約70倍）が訪れ、そのうち100万人が先進的なまちづくりを見ようとやってきます。

奥羽山脈と北上山地に囲まれ、西側は田園風景が広がり、東側はりんごやぶどうの果樹が盛ん。お米は日本酒となり、果樹からはワインやハードサイダーが作られる豊かな酒のまちでもあります。南部杜氏発祥の地という歴史を持ち、100年続く酒蔵が4つある他、ワイナリーやサイダリーなど10の醸造関連事業者が軒を連ねています。







あづまねエリアの今と、叶えたい未来

紫波町のシンボル「東根山」（標高：928 m）

その東根山への入り口である登山口がある麓のエリアを「あづまねエリア」と呼びます。

東根山から湧き出るやわらかな名水がエリア全体を行き渡り、潤します。東根山から湧き出る「袖滝の清水」は袖滝川になり、それを支流として沢内川、滝名川、と名前を変え、やがて東北最大級の一級河川「北上川」（流域面積 10,150 km²）へと流れを広げながら、太平洋へ旅を続けていきます。

古くから水を分かち合ってきた水分神社では水汲み場があり、多くの人が水を求めてやってきます。エリア一帯に広がる田園にも東根山の水が注がれ、そこで育てられた飯米、酒米はまた東根山の水と一緒に仕込まれて身体に取り込まれていきます。

あづまねエリアは、こうして水を分かち合う「水分地区」の一角のエリアです。

※あづまねエリアは環境省「第3回脱炭素先行地域」に選定されています。脱炭素社会の実現に向けた取り組みは、国からの補助金が受けやすくなります。



あづまねエリアが叶えたい未来 「人が森と育つまち」

マザーマウンテンである東根山、そこから生まれる水。

あづまねエリアは、古くから森と水を分かち合ってきました。この分かち合う文化をより多くの人々に開き、あづまねエリアは「人が森と育つまち」を目指します。

森への愛を育てながら、自然の中で癒されたり、食で元気になったり、自然を愛する世界中の人々の知識と言葉を学べたり、その言葉に後押しされて新たなチャレンジが生まれたり、応援したりしながら、あづまねエリアで過ごす人々は、より生き生きと前向きになれて、同じ志を持つ人の輪が広がっていく未来を叶えたいと思っています。



体の成長
子育て・食育・運動



心の成長
文化へのアクセス・居場所



コミュニティの成長
挑戦と応援・相談窓口・フィールドへのアクセス

温浴施設を中心に、森で遊べるアスレチックや登山、トレイルランの道が整備されていて、地元のファミリーをはじめ、地方での生活を体験させたい県外のファミリーも滞在できる場所。

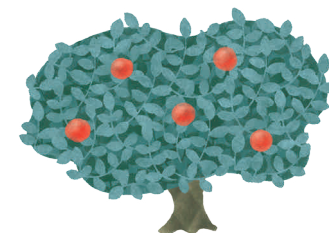
マザーマウンテンである東根山のために、森の知識を学べる文化拠点としての書店、地元の食を地元の人と交流しながら楽しめるレストランやイベント広場。

住む人来る人が交わりながら、心身ともに育つことができます。



あづまねエリアに「今あるもの」と「これから必要なもの」

ゆったりと紫波町の自然を感じたい時、あづまねエリアには訪れたい場所が集まっています。一番の自慢は、登山口から僅か 50m の場所に温泉があること。山と温泉が同時に楽しめるのは、住む人来る人にとっての幸せです。そしてこの温泉を中心に、地元の農産物が買えるお店や、歴史深い神社や町指定文化財の茅葺屋根の家屋などが楽しめます。宮沢賢治の親友だった藤原嘉藤治の故郷でもあり、牧場だった藤原家の土地は、現在は花と緑が楽しめるビューガーデンとして町内外のファミリーに愛されています。宮沢賢治の言葉で知られる「イーハトーブ」の片鱗が見られるこのエリアを守っていくために、今、進化が必要です。



あづまねエリアに「今あるもの」

過ごす	ラ・フランス温泉／ホテルゆらら きぎょう荘 ビューガーデン カフェ すずらの森 東根山	つくる・買う	浅沼養鶏場／たまごショップ 旧紫波農園 dokko base soleil 陽だまり あづまね産直 はじまりの学校
守る	志和稲荷神社 志和古稲荷神社 水分神社 武田家住宅		



水分神社



志和稲荷神社



ビューガーデン

あづまねエリアに「これから必要なもの」



森と水がテーマの
ファミリー向け温浴施設



研修所・宿泊所



自然を知る入り口となる文化拠点
(書店とカフェ)



フォレストアドベンチャー
噴水広場・音楽堂



森林インストラクターと巡る
アクティビティ



あづまねエリアでの暮らし

お米、小麦、蕎麦と季節と共に刻々と変わっていく田畑、奥で構える大きな東根山。

「車窓から眺めるだけでも見物だね」と訪れる人は言ってくれる。水を求めてたくさんの人が通う水分神社の湧き水は、エリアの暮らしでは水道から供給されている贅沢さ。自分の田んぼだけでなくご近所さんの田んぼも見守る、人の優しさが覗ける農風景。登校中に、東根山に一礼している小学生と、子どもたちを笑顔で迎える地域のスクールガードさん。野生動物も多いので、ランドセルにはクマよけの鈴が付けられている。ちりん、ちりん、という鈴の音と共に、こどもたちの笑い声が高い空へ上っていく。あづまねエリアの暮らしは、残していきたい日本の原風景です。





あづまねエリアを含む「水分地区」の数字



人口
1,609 人（男性 753 人 / 女性 856 人）



世帯数
600 世帯



交流人口
1,486,354 人

あづまねエリアでの暮らし



農

飯米 / 酒米 / もち米 / 小麦 / アスパラ etc.



木

杉 / 栗 / 楓 etc.



産直

あづまね産直 (町内には8の産直)



醸造

日本酒 / ハードサイダー / クラフトコーラ



学校

西の社小学校 / 紫波第三中学校













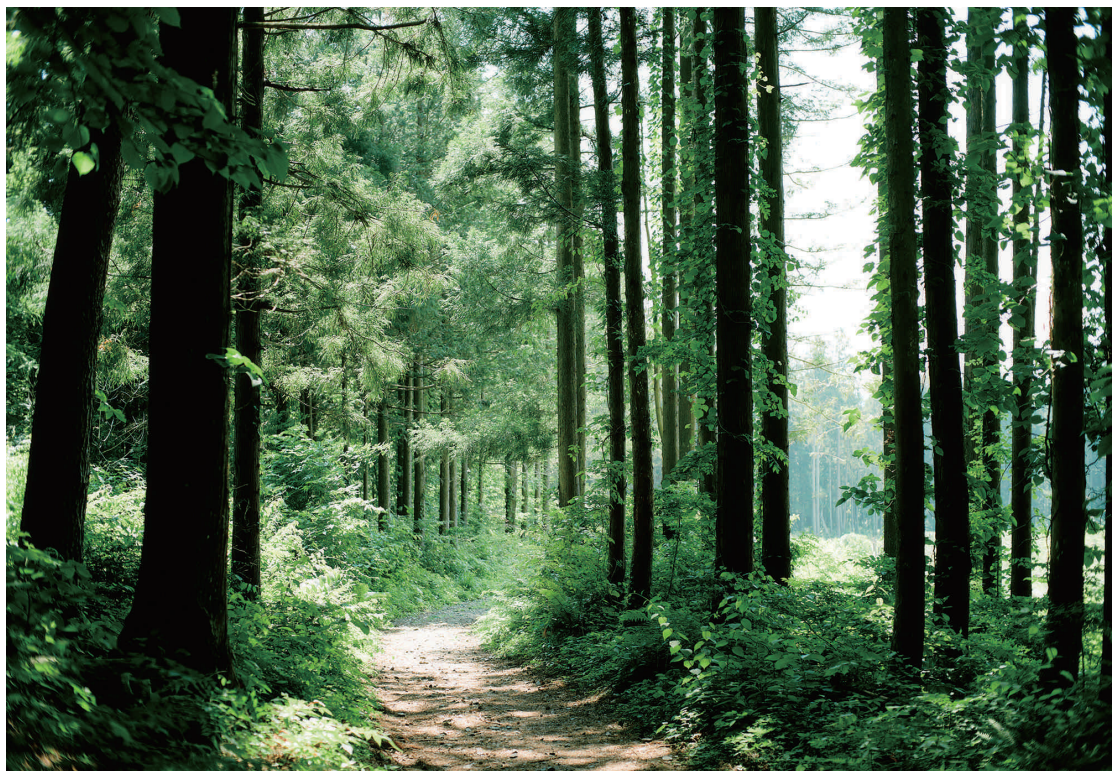


9つの文化が息づくまち

紫波町は昭和30年に、1町8カ村が合併して誕生しました。日詰町、水分、古館、志和、赤石、彦部、佐比内、赤沢、長岡村。

特色豊かな9つの地域から構成される紫波町だからこそ、「フルーツの里」や「酒のまち」、「若者がチャレンジできるまち」や「公民連携の先進地」等、呼ばれ方はさまざま。そのどれもが過去形ではなく現在進行形です。プロジェクトが生まれ続けるまちであり、全国から関わりたい人が絶えないまちでもあります。







紫波町に根差す「酒」

紫波町は日本酒の酒蔵だけで4蔵あって、ワイナリーもあって、サイダリーも2つ、そしてスピリッツを手掛ける会社や、元酒蔵の若者がチャレンジするマイクロブルワリー、醸造初心者の若者がチャレンジするマイクロブルワリーも誕生予定で、合計10の酒造りの拠点をもちます。3万3千人の小さなまちにこれだけの多酒と多様な酒人材が集まるのは例を見ません。

お米、りんご、ぶどう、水、木材、酒を造る人、まさに紫波町は酒を造るために存在しているような町。これが、日本三大杜氏集団の南部杜氏発祥の地である理由です。









紫波の酒づくりの拠点

日本酒	吾妻嶺／合名会社吾妻嶺酒造店
	月の輪／有限会社月の輪酒造店
	廣喜／株式会社紫波酒造店
	堀の井／高橋酒造店
クラフトサケ	株式会社平六醸造
	株式会社酒と学校
ワイン	株式会社紫波フルーツパーク
ハードサイダー	紫波サイダリー合同会社
	Green Neighbors Hard Cider Co.,Ltd.
クラフトジン	株式会社 LOSS IS MORE







新たな酒文化を醸す「はじまりの学校」

はじまりの学校

日本酒、ワイン、ハードサイダー、クラフトサケ、クラフトジン等、多種多様なお酒が集まる酒のまち紫波町の廃校になった小学校が新たな醸造場として生まれ変わります。

「普段はただの飲み手でも、ここに来れば造り手になれる」醸造はもちろん、企画、デザイン、PR、イベント等も含めた、新しいお酒との関わりを生み出す場所を目指し、令和5年度から改修工事がスタート。令和4年度から、町内の醸造事業者とコラボしたオリジナルブランド「はじまりのお酒」シリーズを展開、校舎内の「はじまりの酒店」で販売中です。

はじまりの酒蔵（コミュニティ）

「酒のまち紫波で日本酒造りをはじめよう」と募集をかけ、酒のまち紫波推進ビジョンへの共感のもと、その拠点施設である「はじまりの学校」のオリジナルブランド「はじまりのお酒」を一緒に育てている会員制有料コミュニティ。会員の95%は県外で、カナダやオランダからの参加者も。紫波町産の酒米栽培や酒造りの現場に足を運び、紫波の人々と触れ合いながら、南部杜氏発祥の地を舞台に日本酒の未来を考えるお酒の輪が広がっています。



- 夏の純米セット 1000
- 吟醸セット 1200





町民のくらしを育てる「オガール」

東北弁で「成長」を意味する「おがる」と、フランス語で「駅」を意味する「ガール」が組み合わさって名前になった「オガール」は、8種の飲食店や7つの販売店の他に、3つのクリニック、2つの体育館、ホテル、図書館、サッカー場、スポーツジム、美容院、複数のレンタルスペース、様々なサービス業などの入った複合的な施設です。紫波町役場もオガールの中に位置しています。

農村と都市を結ぶ中央部の核となるエリア。駅直結の立地を活かしたイベントや行政視察や研修など年間100万人が訪れています。（全国自治体視察ランキングでは2017年から3年連続で1位に）











コミュニケーションが生まれる図書館

紫波町図書館は平成 24 年8月、「オガールプロジェクト」の一環で、図書館がなかった紫波町の待望の公立図書館として誕生しました。農村と都市を結ぶオガールにおいて、農業の関連図書や地域資料が充実していて、どんな質問にも親身に応えてくれる司書とのコミュニケーションが魅力。「何かあれば図書館へ相談に行こう」と思ってしまう心強い存在です。BGM が流れる館内は、飲み物を持ち込みできる閲覧カウンターやお弁当を食べながら本を読める読書テラスも。紫波で起きていることがよく分かる企画展示や「夜のとしょかん」イベントも人気で、さまざまな取り組みが認められ、平成 28 年には、図書館の先進的な活動や市民と取り組む創造的な活動を評価する「ライブラリー・オブ・ザ・イヤー 2016」で優秀賞を受賞しました。



夜のとしょかん

閉館後の図書館を会場に人々が集い、夜のムードの中で開催されるキャンセル待ち必至の大人気トークイベント。飲みもの持ち込み、おしゃべり自由で、時にはお酒とおつまみが出ることも。その時々の紫波の旬なプロジェクトや話題をテーマに、関係するまちの人からリアルなお話を聞くことができます。

夜のとしょかんの一例

第28夜。「ボードゲームに出合ったら〜ゲームを通じたこちよい生き方〜」

第29夜。「くどうれいんとわたしたちのことばふるよる。」

第30夜。「音のない世界に生きること。」

第31夜。「地域をつくる、おいしい選択」



本と商店街

古くは江戸時代から馬の中継地、宿場として商家や職人が軒を連ねた「日詰商店街」。

その日詰商店街を会場に、2 日間にわたり開催する「本とローカリティ」をテーマにしたイベント「本と商店街」。書店や版元、飲食店や小売店など最大で 50 組の出店者が参加しました。

本にまつわる映画の上映や、ひとり出版社〈夏葉社〉島田潤一郎さん、盛岡在住の作家・くどうれいんさんなどのトークイベントや、画家・装丁家である矢萩多聞さんによるワークショップなどが行われ、令和6年には1500人以上が訪れました。令和7年も開催が決定。



本と映画のアクセスがあるかどうか

田舎暮らしをしたい願望があったわけでもない、農家になりたいわけでもなければ、アウトドア趣味もない私が、果たして岩手で楽しく暮らせるのだろうか？

紫波町で暮らせば、美味しい食とお酒が手に入りそうだし、いい環境だということはわかっている。だけど、生活ってそれだけではない。自分の心が満たせるかどうかだ。

私が勤めることになるオガールの中には「紫波町図書館」がある。開館して十年の図書館はとても綺麗で、天井が広くて明るい。そして足を一歩踏み入れると、たくさん面出しされた絵本と、司書さんの「こんにちはー」

に迎え入れられる。そもそも私は普段、図書館スタッフさんとあいさつを交わしていただろうか。その「こんにちは」には、「May I help you?」よりも「Feel free to help yourself」というニュアンスを感じた。

館内には飲食可能なスペースもあり、うっすらとBGMがかかかっていて、窓際には生花が小さな花瓶に生けられ、喫茶店さながらの雰囲気がある。

本と映画へのアクセスがあるかどうか（あまのさくや著 『はんこ作家の岩手生活 上』より引用）

あまのさくや／絵はんこ作家

はんことことばで物語をつづる。絵はんこ作家、エッセイスト、チェコ親善アンバサダー。本づくりワークショップや、旅行記・介護にまつわるエッセイ連載なども手掛ける。







東根山の日条例

町民に愛される紫波町のシンボル東根山。紫波町をより愛してもらう施策をまちのファンと話し合い、標高928mにちなんで、9月28日を「東根山の日」として記念日にすることを条例で制定しました。全国では「富士山の日」などがありますが、県内自治体では初めての試みのようです。

「自分らしい楽しみ方で、自然に一步近づく日」と謳い、身近な自然への愛を深めていただく日として、イベントAZUMANE WEEKを開催するなど盛り上がりを見せています。







AZUMANE WEEK

東根山の日条例制定を記念して、毎年9月28日前後の週末を中心に「AZUMANE WEEK」と題したイベントを開催。東根山麓のラ・フランス温泉館を中心としたエリアで子ども向け登山やサウナ熱波イベント、山を駆け抜けるトレイルランニングや、エリアの食と伝統芸能を楽しむお祭りなど、多種多様なイベントが開催され全国から多くの人が足を運びます。

木の実 コレクション

memo

木の実は木の赤ちゃんだから、
見つけた木の実は全部拾わずに
森の生き物や、新しい木になるために残しておこう！

マークの意味



.....食べてOK!おいしいよ



.....毒があるので食べちゃダメ



クヌギのどんぐり

たまご型の実



ミズナラのどんぐり

細長い実



コナラのどんぐり



アカマツのまつぼっくり

直径 2 cm



スギの実

そのままジャムも美味しい



😊 クワ



😊 モミジイチゴ

リスは好物のクルミやどんぐりを
1個ずつ土の中に埋めて貯え、
冬の間に少しずつ掘り出して食べるよ。
でも全部は探し出せないで、
残った実が芽を出し新しい木となるんだね。

森を知る冊子「森へのとびら」

紫波町のシンボルである東根山の中に足を踏み入れると、さまざまな種類の木の实や、野草、キノコや動物の痕跡を見ることができます。そんな東根山の楽しさを詰め込んだ冊子を、紫波町で森林インストラクターとして活動している岡田菜月さん監修で、水分こどもカメラ隊が撮影した写真、そしてきのこ王子の高橋久祐さん、水分公民館や役場の登山家の皆さんと一緒に作りました。『東根山の木の实』、『東根山の植物』、『東根山のきのこ』、『東根山のどうぶつ』などなど、東根山尽くしの楽しい 12 ページとなっています。





若者がチャレンジできるまち／地域おこし協力隊

挑戦を応援する風土に、全国からユニークな人が集まります。

天野 咲耶（地域情報編集発信担当）	紫波町図書館の SNS、イベント「本と商店街」
岡本 夏佳（里山リノベーション担当）	パンク魂で農業の魅力を発信、ワイン醸造家
村上 一江（農村まちづくりコーディネーター）	食用ほおずきの栽培、まちの野菜で餃子屋さん
佐藤 省吾（くらしの豊かさ提案担当）	イベント企画運営、店舗ディスプレイ
中濱 さくら（ルーラルライフコーディネート担当）	ノウルプロジェクトメンバー
山崎 彩子（食でつながるまち担当）	弘前市でカフェを営んでいたシェフ
河合 愛（インクルーシブコミュニティ担当）	こども食堂、食育活動
永安 祐大（ブルワリーコーディネーター）	はじまりの学校初の醸造家
近藤 雄太（鳥獣被害対策担当）	クマ、イノシシ、ニホンジカ等の被害対策



ビジョンをみんなで叶えようとする気持ち

あづまねエリアのビジョンを叶えるために、自分たちに何ができるのか。どんな人が来てくれて、その人達を喜ばせるためにできることは何か。エリアの事業者からは夢溢れるアイデアが寄せられています。

登山の楽しさを知ってもらいたい、森林教室やナイトハイクをやってみたい、ツリーハウスで子どもにも大人にも遊んでもらいたいなど、東根山への愛を育てるアイデアがたくさん。

去年、長崎の小学生が飛ばした風船が紫波町あづまねエリアまで飛んできました。その風船にはひまわりの種が括りつけてあり、大切に育てて見事なひまわりを咲かせています。そのひまわりをもっと咲かせようという声も複数の事業者から出ています。



あづまねエリアで「したいこと」一例



東根山の日 (9/28) に登山をする企画
(水分公民館)



キャンプ場のオープン
(ビューガーデン)



森林教室・ナイトハイク・早朝登山の企画
(森林インストラクター)



自然の中やプールサイドでのサウナイベント
(ラ・フランス温泉館)

新しいあづまねエリアで 自分の会社ができること・やりたいこと

ラ・フランス温泉館	プールサイドや自然の中でのサウナイベント／夜の産直
紫波町水分公民館	小中学生へサマーキャンプ／花いっぱいコンクール
soleil 陽だまり	オリジナルクラフトコーラの製造販売／障がい者の就労体験
水分農産	自分で植えた苗を収穫まで体験／山小屋をつくる
ききょう荘	高齢者が集まりやすく（交通）、幼児と触れ合える施設運営（総合福祉）
ビューガーデン	ひまわり迷路／キャンプ場／天文台／花オブジェ／ツリーハウス
紫波酒造店	町産米での酒造り／酒まつり／酒粕を肥料に／みりん、酢の醸造
ウエノ不動産	空いている建物を活用した産直
森林インストラクター	ナイトハイク／早朝森林探索
あづまね産直	山菜やきのこの販売・収穫体験／きのこの植菌
ファンベースカンパニー	世界で一番新しい酒体験ができるツアー／杉の香りツアー





東根山の自然に抱かれた「日常に森がある生活」

森林インストラクター 岡田菜月

小学生の時、初めて登った山が東根山でした。当時は登るのが大変だったけれど歩くのが楽しかったことや、登頂できたことが嬉しかったことしか覚えていないのですが、大学で森林や林業や森の生き物について学び、大人になってから登った東根山は、季節の草花や標高が上がるにつれ人工林から天然林に変わっていく様子、野鳥の声や哺乳類の痕跡など、素敵なもので溢れていることを知りました。その「素敵なもの」を知ってもらいたくて、森林インストラクターとして活動しています。登山はハードルが高くてなかなか東根山に足が向かない方もいるでしょう。あづまねエリアがリニューアルしたら、温泉からさらに足を延ばして麓の森林の自然に

触れてみてほしいと思っています。季節の移り変わりとともに様々な花が咲き、野鳥の声や虫の声が聞こえます。ツキノワグマやニホンカモシカ等の大型哺乳類が暮らす豊かな生態系があります。その豊かな生態系を育む森から湧き出る綺麗な湧き水や、様々な山菜やきのこがあります。

紫波町で暮らす方々には、東根山を町のシンボルとして遠くから眺めるだけでなく、あづまねエリアに立ち寄り「素敵なもの」を見つけてもらいたいです。そして、東根山の自然に抱かれた「日常に森がある生活」を楽しんでもらいたいです。





データで見る紫波町

人口からみる紫波町

過去10年間における人口推移

参照元：紫波町 HP【統計情報】人口と世帯数（住民基本台帳登録人口集計表）



紫波町の人口は、人口減少が激しい岩手県の中で「維持または微増」しています。盛岡や花巻といった岩手の都市の中間にあるアクセスの良さと、次々に開発される宅地分譲の多さ、価格帯からファミリー世代に住む場所として選ばれています。大東建託㈱が実施した居住満足度調査「いい部屋ネット 街の幸福度ランキング2021」では、2021年の街の幸福度の岩手県内第1位。同様に「住みたい街ランキング」や「住みこちランキン

グ」でも毎年上位にランクインしています。絵はんこ作家、シェフ、農業女子、醸造家などユニークな人材が集まる地域おこし協力隊が発信する紫波町暮らしの魅力の高さや、年中絶えず開催される地域のイベントが町内外の人々の足を紫波町へ向かせ、そこからご縁が生まれることも多いようです。「元気なまち」「このまちに住みたい」「わが子のふるさとにしてあげたい」という嬉しい声をいただいています。

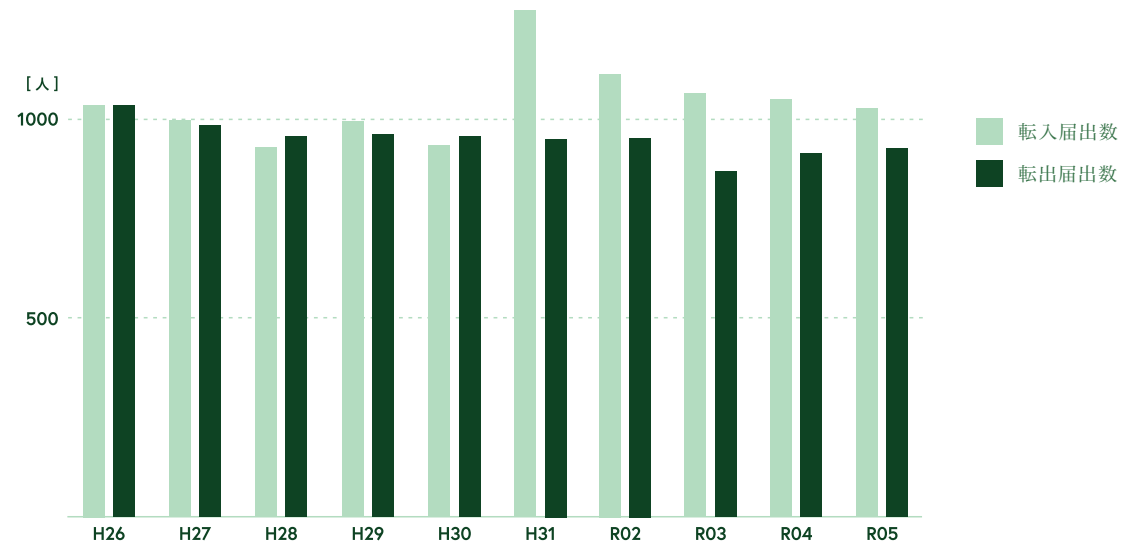
人口 32,760 人

男 15,784 人

女 16,976 人

※令和6年6月現在

年度別 転入・転出届出数



紫波町には小中高までの学校はありますが、専門学校や大学はありません。進学や就職でまちを出ていく若者は常に一定数いますが、特に直近5年は転出を上回る転入数が顕著です。前項のように、ファミリー世代に選ばれている点が最も大きいです。

紫波町は、オガールプロジェクトをはじめ、廃校になった7校を「新たな醸造場」や「農をテーマにしたホテル、レストラン」「絵本の森保育園」など、魅力的なプロジェ

クト活用をほぼ同時進行で進めるなど積極的かつ先進的なまちづくりを進めています。このようなおもしろさが絶えず生まれ続けていることが、転出していった若者がまた町へ戻ってくることに繋がることを願っています。

交流人口からみる紫波町

水分地区の人口と交流人口の比較

水分地区の交流人口は、地域住民の約**185**倍



水分地区の人口
人口 1,609人
男：753人 女：856人
(2024年6月現在)



水分地区の交流人口
297,271人
(過去5年間の平均値)

あづまねエリアがある水分地区は、町内9つの地区では4番目に人口が少なく、高齢化率は、若者の人口増加が多い中央部に比べると10～15%ほど高く約40%です。普段は農作業をしている人や、犬の散歩をしている人、通学中の小学生など、とても和やかな田舎の風景が見られますが、温泉や東根山という観光資源に加えて、年間を通して人気イベントが多く、エリアの交流人口はなんと地区住民の185倍の約30万人にもなります。(直近5年の平均値)

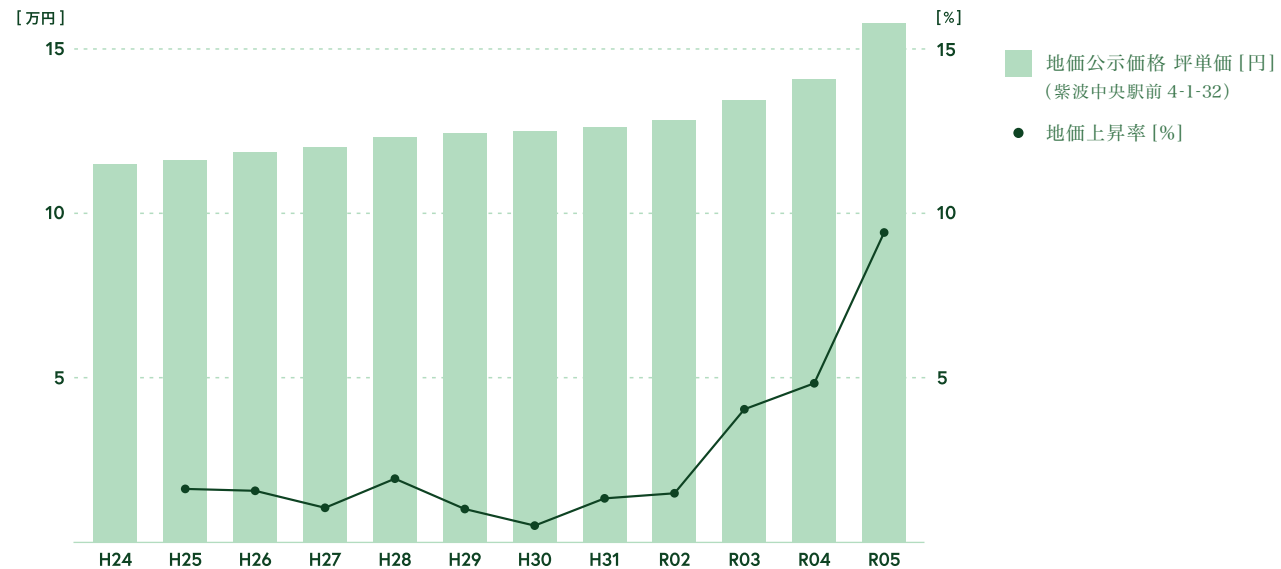
東北最大級のクラフトフェア「ポラーノまつり」、全国の

南部杜氏が造る日本酒が集まる「全国蔵元フェスティバル」、東根山の日を祝う一大山イベント「AZUMANE WEEK」などが毎年開催され、紫波でのイベントが毎年恒例の待ち合わせ場所になっている方もちらほら。

地域の方々も、イベントを開催すると全国から多くのお客様が来てくれて、地元の食や自然の豊かさ、人との交流を喜んでもらえることに誇りに思っています。エリアで生まれる交流人口の輪が、地域を守ることにつながっていく未来を目指します。

地価からみる紫波町

地価公示価格の推移



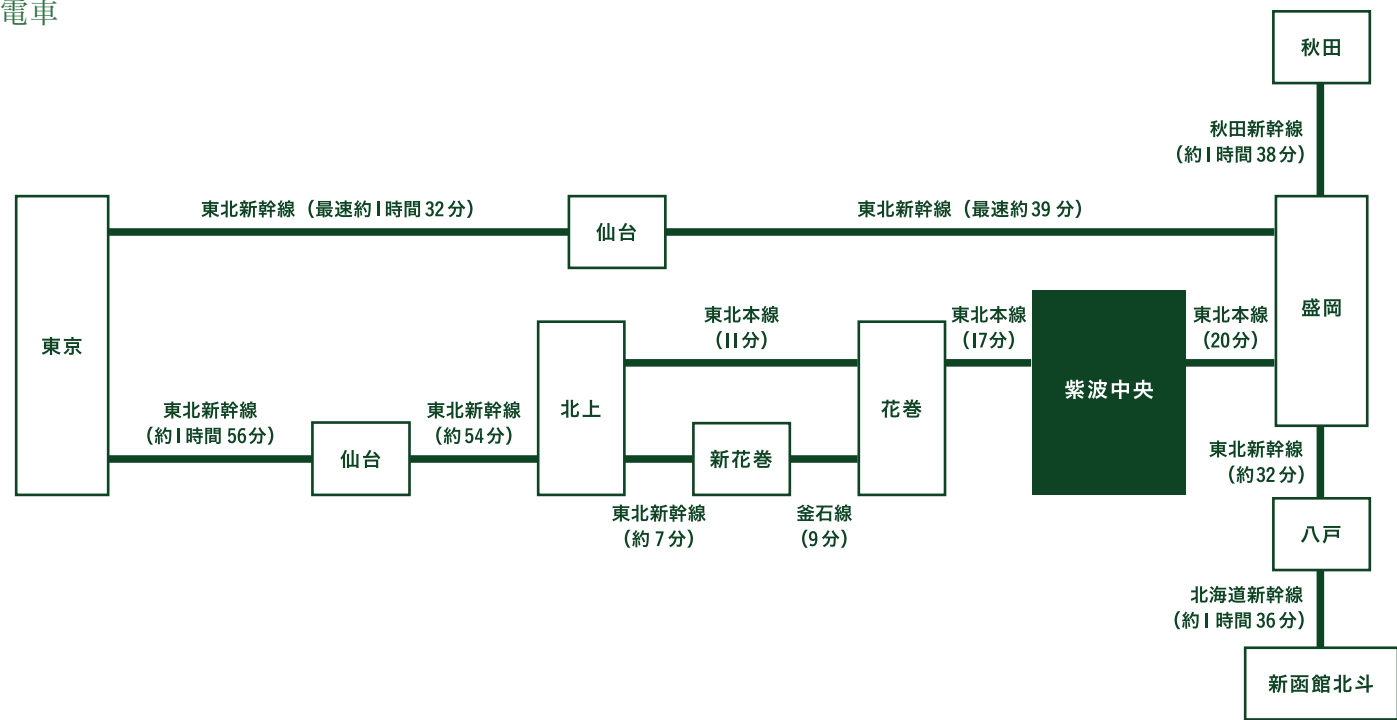
紫波町のまちづくりは常に「エリアとしての価値を向上させる」ことを意識して行われてきました。全国に名高いオガールプロジェクトをきっかけに、町の中央部にある紫波中央駅前の地価はこの11年間で33.1%、11,600円/m² (38,348円/坪) 上昇しています。

中央部エリアはファミリー世代から特に人気があり、3校ある小学校のうち1校は校舎のキャパを超えた子どもの入学数となりグラウンドに校舎を増築するという、地方においては異例の事態が起っています。



紫波町への交通アクセス

電車



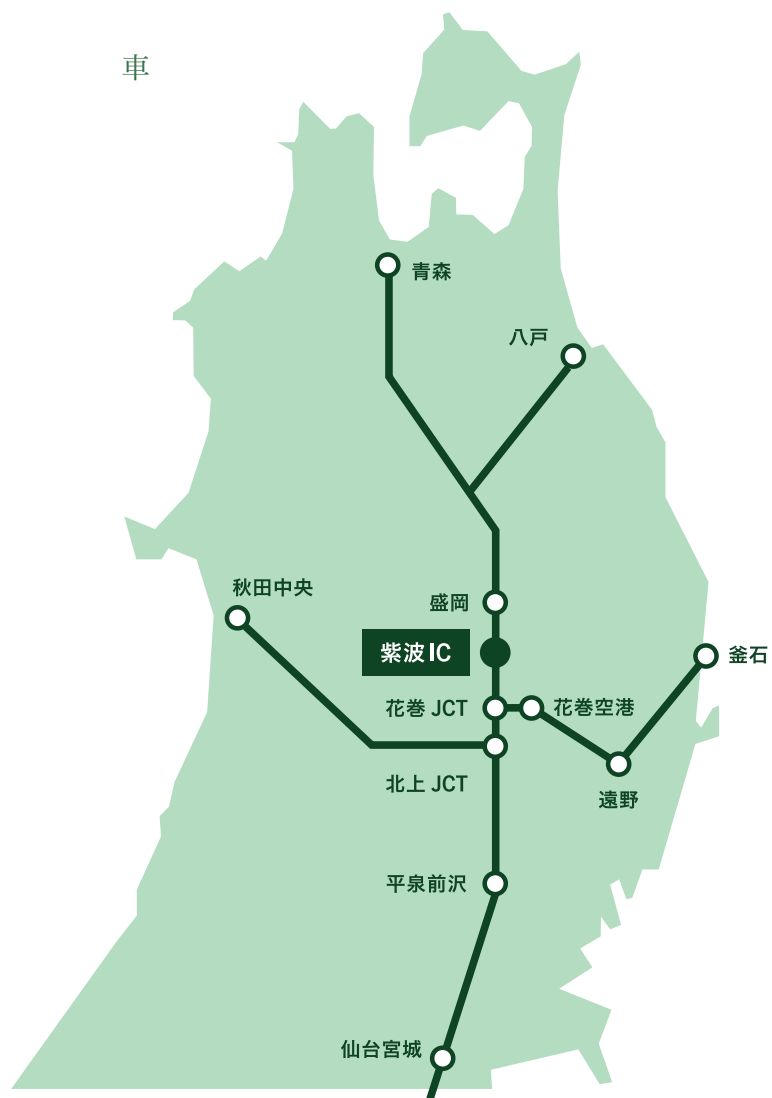
「東京から新大阪へ行くよりも近い」と驚かれたことがあります。

紫波町へのアクセスは、関東の方は新幹線が便利。東京駅から新幹線で盛岡までは2時間半、東北本線に乗り換えて5駅、約20分で到着します。車で来ても30分ほどなので、盛岡からレンタカーで来る方も多いです。

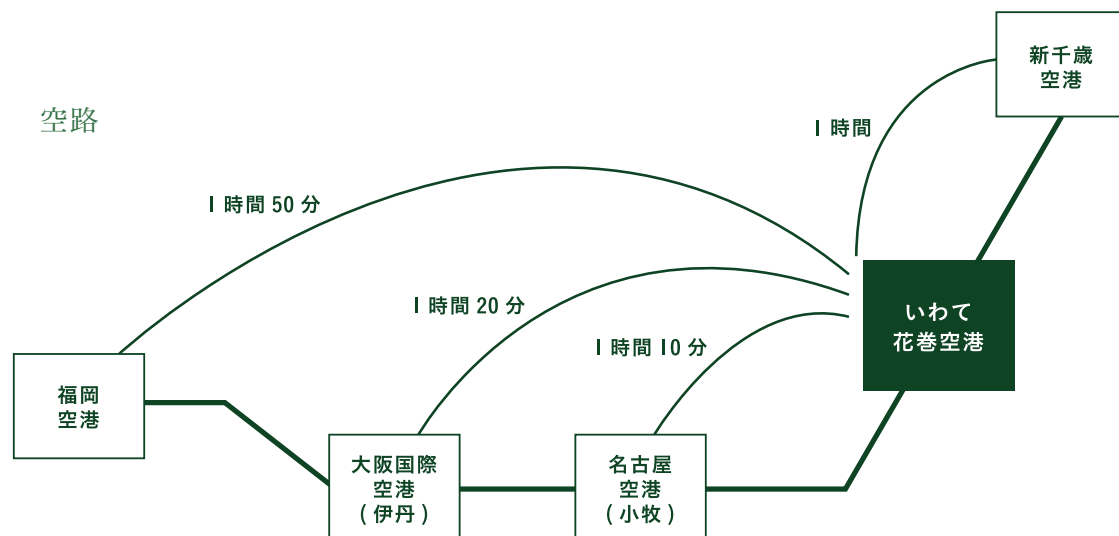
北海道、大阪、名古屋、福岡の方は飛行機が便利で、いわて花巻空港までいずれも2時間以内で着陸します。

ちなみに紫波町役場もあるオガールは紫波中央駅前から徒歩1分。お客さまを徒歩で駅までお迎えにあがることが多いです。オガールから車で西に10分ほど走るとあづまねエリアに到着します。

車



空路





本誌の制作にあたって

紫波町あづまねエリアが今、大きく変わろうとしています。

頭で思い描くビジョンを、素敵なイラストに仕上げてくれた熊谷さん。あづまねエリアの価値ある風景を瑞々しい写真で魅せてくれた三輪さん。そしてこれまで数多くの紫波町のクリエイティブを生み出してくれた川島さん、石上さん。その全体を、力強く真つすぐに先導してくださった宮崎さん。紫波町はいつも、町に関わる人の愛で輝くことができます。ありがとうございます。

あづまねエリアの未来のビジョンは、町の力だけでは到底叶うものではありません。

本誌がたくさんの方々の力によって生み出されたように、ビジョンに向かってチームとなってくれるパートナーが必要です。対話しながらノートみたいに書き込めるように、余白をたっぷり残しています。本誌『partner note』が、紫波町の未来と、パートナーの未来を結ぶ、ご縁のはじまりになることを願って。

Edit	須川 翔太（紫波町役場） 伊東 唯（紫波町役場）
Design	川島 佳輔（cokage studio） 石上 梨乃（cokage studio）
Illustration	熊谷 奈保子
Photograph	三輪 卓護（otan photography） 伊東 唯（紫波町役場） 川島 佳輔（cokage studio）
Produce / Art Direction	宮崎 直哉（株式会社フライング・ブレイン）

紫波町役場
〒 028-3392
岩手県紫波郡紫波町紫波中央駅前二丁目3 番地 1
電話番号（代表） 019-672-2111
FAX 019-672-2311

引用・参照

紫波町 HP【統計情報】人口と世帯数（住民基本台帳登録人口集計表）

紫波町商工観光課 交流人口集計

紫波町図書館 10 周年記念誌

あまのさくや『はんこ作家の岩手生活＜上＞』（生活綴方出版部）

あまのさくや / はんこことば - note

